

3 Problems (Section 3)

3.1 Hints

3.1 方位角対称なポテンシャルを Legendre 多項式で展開したときの一般形

$$\Phi(r, \theta) = \sum_{l=0}^{\infty} (A_l r^l + B_l r^{-(l+1)}) P_l(\cos \theta) \quad (3.1)$$

に代入して、境界条件から各係数 A_l, B_l を決定する。また、偶数次の Legendre 多項式について、

$$P_n(0) = (-1)^{n/2} 2^{-n} \binom{n}{n/2} \quad (3.2)$$

が成り立つ。

3.2 (a) (3.1) のように展開して、表面電荷密度による境界条件を考えれば良い。また、Legendre 多項式の直交関係式

$$\int_0^1 dx P_l(x) P_l(x) = \frac{2}{2l+1} \delta_{ll} \quad (3.3)$$

および負の指数をとる場合の式

$$P_l(-x) = (-1)^l P_l(x) \quad (3.4)$$

を用いられたい。

(b) $E = -\nabla\Phi$ を用いて原点での電場を計算できる。また、 $\hat{z} = \cos\theta\hat{r} - \sin\theta\hat{\theta}$ を用いると、結果を \hat{z} のみで表すことができる。

(c) (2) では $\beta = \pi - \alpha$ として $\beta \rightarrow 0$ の極限を考えるほうがやりやすい。

3.3 後で

3.4 (a) ポテンシャルを球面調和関数で展開する。

$$\Phi(r, \theta, \phi) = \sum_{l=0}^{\infty} \sum_{m=-l}^l (A_{lm} r^l + B_{lm} r^{-(l+1)}) Y_{lm}(\theta, \phi) \quad (3.5)$$

である。境界条件は $r = a$ の球面上で考えれば良い。 ϕ の値でポテンシャルを場合分けして考えると見通しが良い。

(b) (a) の結果を用いて具体的な計算をするだけ。本文 §3.3 中の式 (3.36) との比較のときには、座標軸の取り方に注意をする必要がある。具体的には $\cos\theta' = \sin\theta\sin\phi$ である。

3.5 本文中の式 (3.70) を r, a でそれぞれ微分、差を考えて $d\Omega' V(\theta', \phi')$ で積分をすればよい。

3.6 ポテンシャルが具体的に計算できるので、本文中の式 (3.70) を使って球面調和関数で展開した後に、和を考えれば良い。

3.7 前問と同じように考えれば良い。

3.8 $\log(\csc\theta) = \log(1/\sin\theta)$ を Legendre 多項式で展開する。積分

$$\int dx \log(1-x^2) = (1+x)\log(1+x) - (1-x)\log(1-x) - 2x \quad (3.6)$$

を使うと見通しが良い。

3.9 円筒座標系での Laplacian は

$$\nabla^2 = \frac{1}{\rho} \frac{\partial}{\partial \rho} \left(\rho \frac{\partial}{\partial \rho} \right) + \frac{1}{\rho^2} \frac{\partial^2}{\partial \phi^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \quad (3.7)$$

である。これを $z = 0, L$ での境界条件に注意して解けばよい。

3.10 前問の結果を用いる。(b) での極限を考えるときは、漸近形

$$I_\nu(z) \sim \frac{1}{\nu!} \left(\frac{z}{2} \right)^\nu + \mathcal{O}(z^{\nu+1}) \quad \text{for } z \ll 1 \quad (3.8)$$

を用いるとよい。三角関数の無限和は \exp での無限級数として考えると見通しが良い。

3.11 あとで

3.12 Bessel 関数に関する公式

$$\int_0^\infty dx e^{-\alpha x} J_0(bx) = \frac{1}{\sqrt{\alpha^2 + b^2}} \quad (3.9)$$

$$\int_0^\infty dx e^{-\alpha x} [J_0(bx)]^2 = \frac{2}{\pi \sqrt{\alpha^2 + 4b^2}} K\left(\frac{2b}{\sqrt{\alpha^2 + 4b^2}}\right) \quad (3.10)$$

が知られている。ここで、 $K(k)$ は第一種完全楕円積分

$$K(k) = \int_0^{\pi/2} \frac{d\theta}{\sqrt{1-k^2 \sin^2 \theta}} \quad (3.11)$$

である。

3.13 Legendre 多項式の積分について

$$\int_0^1 dx P_l(x) = \begin{cases} 1 & \text{if } l=0 \\ \frac{(-1)^k (2k-1)!!}{2^{k+1} (k+1)!} & \text{if } l=2k+1; k=0, 1, \dots \\ 0 & \text{if } l=2k; k=1, 2, \dots \end{cases} \quad (3.12)$$

がわかる。

3.14 線電荷密度を求めてそれを体積電荷密度として書けば良い。

3.15 あとで

3.16 (a) デルタ関数は

$$\lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \delta_\varepsilon(x) = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{\sin(x/\varepsilon)}{x/\varepsilon} \frac{1}{\pi \varepsilon} = \delta(x) \quad (3.13)$$

とかける。

(b) 基本的には本文 §3.11 の議論と同様にすれば良い。

(c) (b) の結果を用いる。

(d) Bessel の積分表示

$$J_n(x) = \frac{1}{\pi} \int_0^\pi d\theta \cos(n\theta - x \sin \theta) \quad (3.14)$$

$$= \frac{1}{2\pi} \int_0^{2\pi} d\theta \cos(n\theta - x \sin \theta) \quad (3.15)$$

および Hansen の積分表示

$$J_n(x) = \frac{1}{i^n \pi} \int_0^\pi e^{ix \cos \theta} \cos(n\theta) \quad (3.16)$$

がある。

3.17 (a) Fourier 展開、あるいは Fourier 半区間展開により

$$\delta(\phi - \phi') = \frac{1}{2\pi} \sum_{m=-\infty}^{\infty} e^{im(\phi - \phi')} \quad (3.17)$$

$$\delta(z - z') = \frac{2}{L} \sum_{n=1}^{\infty} \sin\left(\frac{n\pi z}{L}\right) \sin\left(\frac{n\pi z'}{L}\right) \quad (3.18)$$

がわかる。

(b) 問題 3.16(a) の結果を用いて ρ, ϕ 方向について展開をした後、 z 方向について Green 関数の満たすべき条件を考える。

3.18 (a) 円筒関数系での Laplace 方程式を境界条件

$$\begin{cases} \Phi = 0 & \text{on } z = 0 \\ \Phi = V\theta(a - \rho) & \text{on } z = L \end{cases} \quad (3.19)$$

で解く。ただし $\theta(\cdot)$ は Heaviside の階段関数。

(b) Bessel 関数、sinh 関数を級数展開して、最低次の寄与を計算する。

(c) (b) と同様に考える。

3.19 Gradshteyn & Ryzhik (2014) の式 (6.666) より

$$\int_0^\infty dx x^{\nu+1} \frac{\sinh(\alpha x)}{\sinh(\pi x)} J_\nu(\beta x) = \frac{2}{\pi} \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} n^{\nu+1} \sin(n\alpha) K_\nu(n\beta) \quad \text{for } |\Re(\alpha)| < 1, \Re(\nu) > -1 \quad (3.20)$$

が成り立つ。

3.20 問題 3.17 で考えた Green 関数を用いることができる。

3.21 問題 1.18(b) の結果を用いる。また、Gradshteyn & Ryzhik (2014) 式 (6.554) より

$$\int_0^1 dx \frac{x}{\sqrt{1-x^2}} J_0(xy) = \frac{\sin y}{y} \quad \text{for } y > 0 \quad (3.21)$$

である。

3.22

3.2 Answers

References

Gradshteyn, I., & Ryzhik, I. 2014, Table of Integrals, Series, and Products (Academic Press), doi:<https://doi.org/10.1016/C2010-0-64839-5>